

講座

パワー・ポリティクスの変容

リアリズムとの葛藤

世紀間の 世界政治

5 鴨 武彦 編集

日本評論社

000
E302
424

講座

パワー・ポリティクスの変容
リアリズムとの葛藤

世紀間の 世界政治

5 鴨 武彦 編集



日本評論社

1994, 10, 15

NB

●講座・世紀間の世界政治 第5巻

パワー・ポリティクスの変容
——リアリズムとの葛藤

1994年4月30日 第1版第1刷発行

編者——鴨 武彦

発行者——大石 進

発行所——株式会社 日本評論社

東京都豊島区南大塚3-10-10 (〒170)

電話03-3987-8611

振替東京 0 = 16

印刷所——平文社

製本所——稲村製本

© T. Kamo

装幀／銀山宏子 Printed in Japan

ISBN4-535-06625-6

刊行にあたって

世界政治は、今、かつて経験してこなかったような歴史の大きくかつ重要な変革の時代にあるといつてよい。一九八〇年代の末以降、世界政治のダイナミズムは、「冷戦の構造」を終焉させ、実に複雑な形態をとりつつ、従来のパワー・ポリティクスの実態や内容を変質、変革させていく方向にあると思われる。その結果、世界政治のダイナミズムは、政府間、非政府間、国際組織、そして諸個人まで含めて多元的なレベルで重要な構造的変化の過程にあると特色づけることができよう。

まさに、変革の時代にあつて、世界政治に新しい創造的な国際秩序や枠組みが大きく求められている。一九九〇年から九一年にかけての湾岸危機および湾岸戦争の不幸な事件があり、またボスニア・ヘルツェゴビナ紛争が依然として続くなど、世界政治は混乱を示しているが、世界政治は、それゆえにこそ、新たな秩序、より正当で確実な安全保障の秩序を必要としているといわなければならない。そこで、私たち研究に志し励む者が、こうした歴史の重大な変容について互いに鋭い感覚を持ち合い、

研究の関心を深め合いつつ、世界政治の変化の実際と今後の方向性、あり方を可能な限り精密かつ着実に解き明かす課題に取り組まなければならないと考える。

そのために、まず、主として戦後一九四〇年代後半以降、国際関係で示されてきた歴史の見方、理論のパラダイム（思考の枠組み）の妥当性や正当性を再考察する必要があると考えていると考える。と同時に、歴史の再考察は、従来の国際政治の理論研究や実証研究、また、地域研究の発展のあり方についても、深く、再検討をせまるものと考ええる。そこで、冷戦の終焉という歴史の大きな変化に学問的関心を収斂させながら、世界政治のさまざまな地域の枠組み（国際体系の中心、周辺構造を含め）、さらにナショナルな視点に関係する政策や思想の問題領域（イッシュー）をとり上げて、世界政治の変動の特色を明らかにし、変革すべき国際秩序の展望の試みにも挑戦したい。

さらに、南北問題の視点の重要さと実際の研究の重要さを、本講座では一つの主要な柱とした上で、日本社会の国際関与のあり方についても踏み込んで議論したい。日本の学界や言論界に本講座の成果を問いたいと考える。

鴨 武彦

講座・世紀間の世界政治 第5巻 パワー・ポリティクスの変容〔目次〕

——リアリズムとの葛藤

目次

第1章

ドイツ外交の現在

——「外交空間」試論

高橋 進

13

はじめに 14

1 問題の発見 17

(1) トポロジカルな変化 17

(2) 問題のアクチャリティ 21

2 問題の所在 25

(1) 引照枠組の変化 25

第2章

パワー・ポリティクスの変容と冷戦

——冷戦の終焉が意味するもの

田中孝彦

69

序説

70

3

「外交空間」

31

(2) 西ドイツ外交のインテレクチャル・フライムワーク 27

(1) 概念 31

(2) 時間的次元▼歴史意識 33

(3) 空間的次元▼西欧、中欧、全欧 38

(4) 「実在」▼国際政治の構図 54

おわりに

61

1	「パワー・ポリティクス」とは何か	72
	(1) 「パワー・ポリティクス」概念の曖昧性	72
	(2) 「パワー・ポリティクス」の定義	75
2	パワー・ポリティクスの変容段階	78
3	冷戦とパワー・ポリティクス	90
	(1) 未成熟なパワー・ポリティクスとしての米ソ冷戦	90
	(2) 米ソ・パワー・ポリティクスの特殊性	92
	(3) 冷戦期における危機管理の試み▼冷戦の多層性	98
4	一九六〇年代末期における冷戦の変化とパワー・ポリティクス	102
5	冷戦の終焉とパワー・ポリティクス	109
	おわりに▼冷戦後の世界政治とパワー・ポリティクス	116
	(1) 脱パワー・ポリティクス化の進展	117

第3章

冷戦の終焉とパワー・ポリティクス …………… 135

——パワー・リアリズム・ヘゲモニーをめぐる視点から 初瀬龍平

はじめに 136

1 封じ込めと政治的リアリズム 139

2 リアリズムとネオ・リアリズム 144

3 一国的安全保障と共通の安全保障 151

- | | | |
|-----|------------------|-----|
| (2) | 脱パワー・ポリティクス化の時差 | 119 |
| (3) | 残存するパワー・ポリティクス認識 | 121 |
| (4) | 課題 | 122 |

第4章

国際政治から世界政治へ

——移行期をとらえるひとつのバースペクティヴ

遠藤誠治

207

1 問題の位相

208

4 パワーとヘゲモニー

158

5 ソ連の崩壊と冷戦の終結

165

6 冷戦期のパワー・ポリティクス

174

7 ヘゲモニーの低落か？

183

8 米国ヘゲモニーの位置

188

まとめと見通し

195

	2	(1) 意識のゆらぎ 208
		(2) 国境を超えた結びつきの強化と世界政治のあいまいさ 210
		「国際政治」と「世界政治」の区別 214
		(1) 「国際政治」の問題構成 214
		(2) 「世界政治」の問題構成 217
	3	「世界政治」からみた「国際政治」(一) 220
		(1) 「国際政治」の成立 221
		(2) 「国際政治」の規範と現実 226
	4	「世界政治」からみた「国際政治」(二)▼戦後「国際政治」の再建 229
	5	世界経済の挑戦と「世界政治」 236
		(1) 社会的弱者の周辺化と戦後型「国際政治」の崩壊 237
		(2) 世界政治の現実▼国家と利益共同体の国際化 238

結びに代えて▼民主主義と世界政治 243

冷戦の終焉と中東のパワー・ポリティクス …… 257

丸山直起

第5章

はじめに 258

1 冷戦の終焉と中東 262

(1) 中東の冷戦 262

(2) 冷戦終焉のインパクト 267

(3) アメリカ一極構造と中東 270

2 中東の石油とパワー・ポリティクス 272

3

中東の国家とパレスチナ問題

280

- (1) 石油をめぐるパワー・バランスの変容 272
- (2) 石油危機後 276

4

イスラーム復興運動

291

- (1) 中東国家システムの現状 280
- (2) PLOの設立 282
- (3) パレスチナ解放運動の新展開 285
- (4) インティファダ 289
- (1) イスラーム復興の動き 291
- (2) 冷戦後のイスラーム世界 294

むすび▼新たな可能性を求めて 297

本巻の目的および趣旨 305

嶋 武彦





ドイツ外交の現在

「外交空間」試論

高橋 進

はじめに

戦後の早い時期、戦後の国際秩序のあり方をめぐり、一大論争が日本でも展開された。いうまでもなく講和問題である。当時、全面講和運動に理論的支柱を与えたのが平和問題談話会であった。熱戦であった朝鮮戦争が始まったなかで『世界』一二月号に公表された談話会の研究報告「三たび平和について」は、激動期のなかの国際政治認識のあり方をいまでも我々に教えてくれる。「きわめて複合的な矛盾した要素をはらみつづ動いている世界政治の現実の認識は」「その錯綜した動向のなかのあたる動向を伸長させることに、意識的に力をかしているという意味で」「意欲を含んだ認識」なのであるとして、東西両陣営の「平和共存」を先見性をもって予言していた。

いまドイツでも冷戦後の国際政治のあり方をめぐり、「意欲を含んだ認識」による一大論争が展開されている。その一翼を担うのが、権力政治論とそれと親和性をもつ様々な主張である。それに対してこれまた様々な鋭い反論が展開されている。この論文の課題は、このドイツでの論争を分析し、紹介することにある。そのため何故このようなテーマを取り上げるのかを説明することから始めたい。その前に、本巻のテーマである権力政治との関連で、一言附言すれば、権力政治論及び権力政治批判には様々なアプローチがあるが、ここでのそれは、権力政治論そして権力政治批判を、より具体的な